

戦争が遺したもの

鶴見俊輔に戦後世代が聞く

● 鶴見俊輔、上野千鶴子、
小熊英二著

哲学者、知識人として80代の現在も精力的に発言し続ける鶴見俊輔に、上野千鶴子と小熊英二がインタビューを試みる。

生い立ちから海軍軍属としての戦争への関わり、『思想の科学』の創刊、『転向』の共同研究、丸山眞男や竹内好ら知識人との交流、ベ平連と脱走兵援助活動など、戦中から戦後の軌跡が数々のエピソードを交えて語られる。へ大学教授よりも学生の側に立つというのが、私の立場だからへ警察導入に抗議して大学を辞め、へヤクザの仁義がちゃんとしている人はいいよへ社会的に高い地位に上ろうと思えばできるのに、そうしない。そういう奴は、それなりに偉いと思っているへといった政治的・思想的立場を越えた人間観が、知識人批判や『がきデカ』讃歌につながってゆくのがよく分かる。ここまで語る気にした2人の聞き手のかけ合いも絶妙で、追従や馴れ合いの賞賛に終わってない対話として見事に結実している。(B6判・403頁・2800円・新曜社)

出版ニュース

2004年 5月中・下旬合併号